

〈巻頭言〉

円光寺文庫と香山院龍温師のこと —学寮関係の蔵書をめぐって—

図書館長・教授 東館 紹見(日本仏教史)

本学の図書館には多くの貴重な古典籍が所蔵されている。それらは大きく、本学の前身にあたる学寮時代から蒐集されてきた旧蔵書の系統と、有縁の方から寄贈を受けた特色ある個別文庫の系統とに分けることができる。もちろん後者の場合も、そのほとんどは本学あるいは学寮で教鞭を執られた先学の所蔵にかかるものなので、その伝来・使用の歴史は本学の歩みと不可分に関わっている。現在は博物館の所管となったものを含む本学所蔵の古典籍群が、コレクションとして他にぬきんでた価値を有するのは、その蒐集の歴史と内容とが、そのまま大学の学的伝統を余すところなく示している点にある。

そうした古典籍の中でも、私が以前から強い関心を持ってきた分野の一つに、江戸時代から明治初年頃にかけての学寮時代の書籍がある。

私が学生時代を過ごした頃の図書館では、蔵書のほとんどは書庫に収納されていて、利用者は必要な本を目録やカードで調べて申請し出してきてもらっていた。正直不便に感じてはいたが、そのおかげで、長い年月をかけて集められた蔵書を適確な分類法で記した分厚い目録や、特色ある個別文庫の目録を見る楽しみを知った。特に歴史専攻の私にとって、江戸時代の学寮の講者や聴衆が集めた古典籍や、戦前の学生たちが遺したインクの跡のある古い書物に接することはとても嬉しいことだった。その上、当時は驚くべきことに、江戸期の典籍でもさほど遡らないものなら館外借出までさせてくれた(!)ので、それらを下宿に連れ帰ったりもできたのであった。そうした図書館との関わりの中でやがて存在を知った古典籍群の一つが、「円光寺文庫」と

称される、香山院(樋口)龍温師(1800-85)の旧蔵書類であった。

香山院龍温師は、幕末から明治初期に学寮の最高学職である講師(第15代)の職にあった人で、この時期の仏教に関わる者が、仏教以外の学問(当時はこれを外学(げがく)といった)をも幅広く学ぶことの必要性に気づき、自らの意識と学寮の組織との改革に努めた人物である。奥州・会津に生まれ、19歳で越後の香樹院徳龍(学寮第11代講師)に学んだ後、京都の高倉学寮に出て研学を続けた。39歳で京都の円光寺に入った後も学寮講師として研究教育に精励しつつ、当時の開国に伴うキリスト教や自然科学などの流入と、国学・儒学からの廃仏論の激化を見すえ、学寮を挙げてこれら「外学」の研究に着手する道を拓いた。

こうした龍温の事績を知るにつけ、私は幕末～明治初期の激動期に会津から京都に出、学事の改革に尽した人物として彼に漠然とした敬意と親しみを抱くようになっていた(全くの私事に属するが私の父が会津出身ということもあって)のであったが、そうした彼の旧蔵書群に改めて接することになったのは、2000年、翌年に近代化百周年を期して刊行が予定されていた『大谷大学百年史』の担当箇所の執筆に際してであった。

私たちの学生時代には、学事の改革を進め、後の清沢満之らの近代教学者たちを育む先鞭を付けたのは、龍温のもとで嗣講の職にあった闡彰院空覚師(1807-71)と教えられていた。彼は、外学研究と東本願寺の寺務改革を強力に進めたことから暗殺されてしまった人で、その死を悼み、志の継承を訴えた『闡彰院の死』(1920年刊)や「大谷大学樹立の

精神」(1925年発表)(いずれも佐々木月樵の著)の存在もあり、専ら「殉教者闡彰院」によって大学近代化の第一歩が記されたという見方がなされていた。しかし私は、上記の龍温の事績から、その見方には以前から少し疑問を抱いていた。調べてみると、空覚が外学研究と寺務改革に尽したことはもちろん事実だったが、全体の方向性を早期に明確化し、キリスト教をはじめとする外学研究の先頭に立ったのが、名実ともにやはり龍温だったことは動かしがたいように思われた。そして、今ひとつ驚かされたのは、彼らの外学研究の関心や姿勢が、決してそのまま開明的なものとは言いにくい、むしろ、自分たちのそれまでの伝統的立場を何とかして守ろうとする色合いが濃いと云わざるを得ないものであったことだった。

それまで自らが依拠していた思想や体制といったものが、時代とともに大きく揺れ動き変化しようとする時、私たちは必ず身構え自分を守ろうとする。しかし、実際にはそこで多くの新たな出会いを経験し、守ろうとした自己が開かれ変わっていくことになる。この時期の学寮、大学やそこで学んだ人々の、まさに一筋縄ではいかない苦闘の軌跡がそこに現われているように思った。そして、その歩みは、後の時代からみた位置づけとは別に、まさしくその時代を生きた人の歩みそのものとして尊いものと思われた。

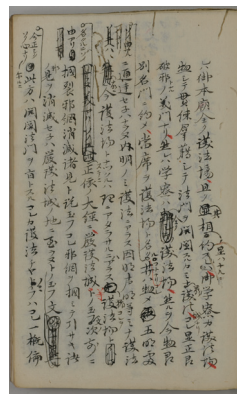
それにしても龍温の旧蔵書に接して知った、彼の学びの浩瀚で緻密な内容と、それを貫く烈々たる姿勢とは、ただただ圧倒されるしかなかった。1300部3000冊の文庫のうち、実に1割以上が自筆の著述で占められ、しかもその範囲は、専門分野の真宗・仏教の学はもとより、外学全般、更には学制や寺務改革に関する具体的建言にまで及ぶ。また、文庫の中でも、聖書などキリスト教関係の書物に関しては、当時、未だ輸入や閲読が厳禁されていた中、中国で漢訳され出版されて間もない刊本を苦心して秘かに入手しており、これらは世界的にも残存例の少ない貴重な文化財として近年改めて注目されているものである。また、自筆写本の中に

は、龍温自身の所属寺や学寮での苦労の様子を記録したものもあり、激動期の京都や学寮の様子をうかがえる興味深い内容に満ちている。

以前に比べて閲覧のハードルはやや高くなってしまったものの、所定の手続きをすれば何時でも当時の先輩たちの息づかいに間近に接することができる。最新の情報に接することとともに、先達と語り合う時間を過ごせることも、本学図書館の大きな魅力の一つではなからうか。



香山院龍温師肖像



龍温の自筆本の一つ

『護法場隨筆反古類集冊』
(宗大7702)

写真は、外学研究を行う護法場開設に際しての演説の原稿部分。師の息づかいが感じられるようである。



龍温が蒐集した、中国で出版されたキリスト教関係の典籍の一つ

『天道溯源』清・咸豐10年
<1860>刊(外大6228)